

学 位 論 文 要 旨

氏 名 大谷 博俊

題 目 知的障害教育における進路指導に関する実践的課題の論究
—特別支援学校の教育課題・課題の関係者・課題の進展過程からの分析—

学位論文要旨（和文2,000字又は英文1,000語程度）

本論文は、序論及び4部で構成した。序論では、本研究の目的と本論文の構成を示した。第1部では、知的障害教育における知的障害特別支援学校高等部の教育について論じた。第2部では、知的障害特別支援学校における進路指導にみる学校から社会への移行を支える環境の調整・整備について論じた。第3部では、知的障害特別支援学校における授業としての進路学習のあり方について論じた。第4部では、本論文を要約すると共に、知的障害教育における進路指導研究論について言及し、今後の展望を示しながら総括的な考察を行った。

各部の内容を具体的に示すと、第1部第1章では、知的障害特別支援学校における職業教育の重要性について、学習指導要領の改訂の趣旨に沿って示した。また、高等部を卒業した知的障害者の進路状況の推移を分析し、職域の拡大について述べ、より一層適確な生徒の実態把握に努めることの重要性を指摘した。第2章では、知的障害特別支援学校高等部に在籍する生徒の実態と教育的課題について述べた。高等部に在籍する生徒の療育手帳種別から、軽度な知的障害のある生徒が増加していることを示し、彼らに対する教育的支援の重要性について指摘した。また、知的障害特別支援学校高等部に在籍する生徒の障害種には、知的障害以外に、アスペルガー障害等の発達障害のある生徒が存在することを示し、彼らに対する教育的支援を検討することの重要性を述べた。第3章では、知的障害特別支援学校の高等部教育における進路指導について述べた。特別支援学校高等部学習指導要領に基づいて、知的障害特別支援学校における進路指導の意義について述べた。また、進路指導における要点が、学校から社会への移行を支える環境の調整・整備としての「連携」、及びキャリア教育における「進路学習」であることを指摘した。

第2部第1章では、知的障害特別支援学校高等部から初職入職のための進路指導において、個別の教育支援計画がもつ意義を検討した。その結果、知的障害特別支援学校から企業への就労に向けた進路指導において、個別の教育支援計画は、進路先担当者を始めとする関係者間の支援体制を明確にし、互いの役割を確認する役割を果たすことが明らかになった。また、個別の教育支援計画に記された被支援者（生徒）の将来の夢や希望を支援関係者が共有することで、関係者による支援の方向性を確認するために寄与することも示された。第2章では、知的障害特別支援学校高等部から、入職期を追い、移行の完遂に向けた進路指導・追指導において、個別の教育支援計画がもつ意義を検討した。その結果、知的障害特別支援学校から企業における入職期全般にわたる進路指導において、個別の教育支援計画に基づく追指導は、進路先の従業員のナチュラルサポートの発生に影響を与えることが明らかになった。また、知的障害特別支援学校から企業への移行を完遂させるためには、入職期に生じる課題に応じて、個別の教育支援計画を活用しながら、本人（卒業生）を支える支援者を適宜加え、

支援体制を再構築する必要性が示唆された。第3章では、離職に対する支援を要する知的障害者への追指導における、知的障害特別支援学校と地域障害者職業センターとの連携の在り方について検討した。その結果、離職に対する支援を要する知的障害者の追指導において、知的障害特別支援学校と地域障害者職業センターとの連携の重要性が改めて確認された。特別支援学校の教員、特に進路指導やアフターケアの担当者には、本人（知的障害特別支援学校の卒業生）と保護者の意思を尊重しながら、職業リハビリテーションサービスの利用へとつなげることが求められることが示された。また、特別支援学校の教員には、卒業生に対する直接の支援だけでなく、労働分野の新たな支援者の、支援体制への参入を援助する役割を担う必要性が示唆された。第4章では、知的障害特別支援学校の就業体験における教員と教育機関外の支援者との連携のあり方について検討した。その結果、教員と教育関係機関外の支援者との連携においては、教育課題（例えば、知的障害者に対する就業体験）の共有化のためのツール（連携ノート）や、教員と教育関係機関外の支援者が支援について協議する場面設定の必要性が示された。そして、これらのことから、教員の他職種に関する理解や他分野の支援者に対する知識・理解が連携を促進させることが、改めて確認された。第5章では、就労支援者が重視する発達障害者の職業生活に関わる自己の理解について検討した。その結果、就労支援者が重視する発達障害者の自己の理解には、複数の側面があることが明らかとなった。具体的には、職業上の困難さを軽減する必要性の理解、職業生活に関わる適応的な態度を有することの理解及び職務遂行の困難さへの対処法の理解である。また、問題軽減の必要性と命名できた、職業上の困難さを軽減する必要性には、支援経験による重視の相違が示された。一方、職業生活に関わる生徒自身の自己の理解を育むためには、学校教育段階での教育活動が重要であることも示唆された。第6章では、知的障害者の自己の理解を促進させるための教育的支援に視点をあて、知的障害特別支援学校高等部の進路学習について検討した。その結果、知的障害者が自己の理解を深めるためには、進路学習において具体的な手がかりとなる情報を提供すること、及び身近な（親近性の高い）事柄を題材として設定することが、教育的支援として有用であることが示唆された。また、生徒自身による評価を学習活動に取り入れる重要性についても改めて示された。

第3部では第1章では、地域社会におけるボランティア活動という啓発的な経験に、自己理解における自己の評価的側面を取り入れた知的障害特別支援学校高等部の進路学習を取り上げ、授業的方法に即して検討した。その結果、総合的な学習の時間における進路学習を授業的方法に即して分析することで、授業の適切さを明らかにすることができ、さらに、授業を改善することにつながることを示された。第2章では、特別支援学校高等部における、特設された2種類の進路学習について検討した。まず、職業リハビリテーション分野の専門家を学校に招いての進路学習について、授業的方法に即して検討した。次に、生徒の生活地域での生涯学習に関わる社会資源および職業リハビリテーションに関わる社会資源の利用を目指した進路学習について、授業的方法に即して検討した。その結果、特設された進路学習を授業的方法に即して分析することで、授業の適切さを明らかにすることができ、さらに、授業改善につながることを示された。また、自己の評価を取り入れた職業生活および地域生活に関わる学習内容の構成は、進路学習における自己の理解を育む支援のあり方を示唆するものであった。

第4部第1章では、本研究の要約を行い、第1部から第3部の各章で得られた知見を述べた。第2章では、知的障害教育における進路指導研究の視座について述べ、進路指導研究を進路指導研究論へと発展させる必要性を指摘した。